

はじめの一步を大切に！

元新宿区立西戸山小学校教諭
安田 恭子

気持ちよいスタートが一年を決める

新しい学年の始まる四月は、やらなくてはならないことが山のようにあるの。学年だよりの名前を考えたり、時間割を作ったり。教室移動の私物整理もあるし……。もちろん会議が目白押し。何も考えないうちに学習がスタートしちゃおう。どうしたらいいの？

「新年度のスタートは大切だよ」って先輩からも言われているんだ。だから、名簿を何回も見て子どもたちの名前を覚えたり、机の配置を工夫したり。まず担任の自己紹介を作って……。一生懸命考えて、子どもたちの前に立つために、去年はなんだか空回りしてたなあ。



未知の世界に胸はずませて入学式を迎える一年生はもちろんのこと、新しい友達や先生と、新しい一年のスタートを切る二年生以上の子どもたちにとっても、新しい教室での始まりはワクワクしてやるべきでしょう。

その大切な学級ひろぎで、どんな「国語ひろぎ」をするか、しっかりと考えておきたいものです。机の上の教科書、ノート、筆箱の置き方、本を読むときの教科書の持ち方、授業中の言葉づかい、ノートの使い方等、何事もはじめが肝心です。学年ごとによく考えて、よいスタートを切りましょう。



一年生は

何よりも「学校に来るのが楽しい」「国語の学習が待ち遠しい」というスタートにしたいものです。

▼名前の掲示

大きな紙に子どもたち全員の名前を丁寧に書き、教室の壁面等に貼りだしておきます。そして、文字学習の都度、学んだ文字を○で囲んでいきます。たったこれだけのことで、文字学習がぐんと楽しくなります。

一学期の終わりには、すべて○で囲まれた名前のカードを、一人ひとりの子どもたちに切り離して渡してあげましょう。

あおき たろう

いのう えじん

うみの ひろし

おおどり あきら

二・三年生なら

たとえクラス替え等がなかったとしても、一学年進級したのだという喜びを意識させましょう。

▼交流学习

二年生に進級した子は一年生の教室へ、三年生ならば一年生の教室に行き、本を読んでもらったり、紙芝居をしてあげたりします。そのことで、「もう一年生とは違うんだ」「こんなに本読みが上手になったんだ」「等の自覚が生まれ、進級の喜びとともに、さらなる向上心が培われることでしょう。



四・五年生では

「いよいよ上学年だ、高学年だ」という自覚と責任を大切にしましょう。もちろん進級を祝福してあげることを忘れてはなりません。

▼コース別学習

国語の教科書のとびらに載っている詩をさまざまな方法で学ばせ、紹介します。それぞれの子どもたちの得意を生かし、自己肯定感をもちたせてスタートしましょう。

A コース 音読

どの言葉にどんな心をこめて読むかを考えて披露します。

B コース 暗唱

自分が心に描いたイメージを声に出して暗唱を聞かせます。

C コース 創作

四年生ならば「あ、今……」の言葉を生かして一年のスタートの思いを詩の形で発表します。他にも絵と説明で紹介したりするコースなどが考えられます。

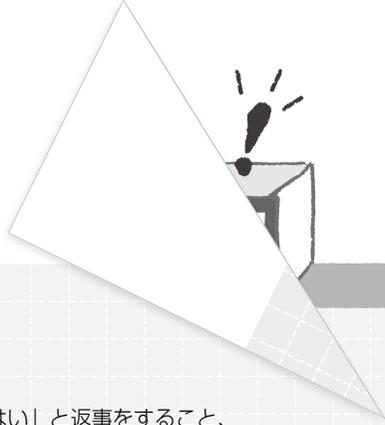
六年生ならば

いよいよ六年間の小学校生活の節目となる一年間のスタート。国語学習の集大成として、どんな自分で卒業し、中学校へ旅立つのかイメージをしっかりとつこうと望まれます。

▼自己診断カード作成

新版の教科書の冒頭には「学習の見通しをもとう」という表があります。それを見て、今までの自分の力を自分なりに見取り、努力すべきことを記入し、一年間の学びに向かう姿勢をつくりましょう。

国語自己診断カード (氏名)			
教材名	今までの力	努力すること	ふり返り
せんねんまんねん		イメージしながら読むこと	(自己評価します)
続けてみよう	読書・詩集は作成済み		
カレーライス	人物関係	お父さん、ぼくそれぞれの立場を考える	
(学びながら書き足していい)			



“国語びらき” 4つの視点

- 1 約束づくり**

名前を呼ばれたら、必ず明るい声で「はい」と返事をする事、学習時の言葉づかいは敬体で行う等、基本の約束を徹底します。利き手によっては、教科書とノートの位置を左右変えた方が、ノートをきちんと体の前で書くことができます。
- 2 話すこと・聞くこと**

学校生活でいちばん大切なことは、人の話を聞いて理解することです。話し手を見て、相手が何を伝えたいかを考え、最後まで聞くことは、1年生の初めから指導しなくてははいけません。また、わからないことを尋ねる習慣もつけましょう。
- 3 書くこと**

「面倒くさい」の一言で、ノート等に文字を書かなかったり、乱暴な字でノートを書きながったりする傾向が見られます。先生自身が丁寧に正しく、より美しい日本語を板書したり、ノートに書き入れたりしましょう。
- 4 読むこと**

「教科書の○ページをあけて…」と言う先生の言葉で学習が始まってしまったり、子どもたちの期待はしぼんでしまいます。挿絵が提示されたり、登場人物のペープサートが動いたり等、1時間ごとのスタートも大いに工夫したいものです。



「国語のびらき」は「字綴りびらき」の土台です。なぜなら、国語の学びこそが、子どもたちの生活の核であるところでも過言ではないからです。

もし、自分のもっている引き出しでは、よく「国語びらき」ができそうでないとしたら、ぜひ、先輩の引き出しも借りて、豊かで楽しく、子どもたちにとって、国語が、学校生活が、大好きになるような「国語びらき」を工夫してください。

自分の得意な分野を生かして取り組むのもいいですね。

学びの心を開く 授業びらきにする

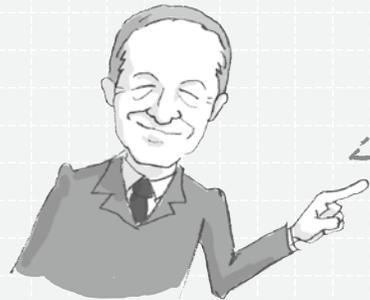
新しい学年になると、子どもも教師も気合いが入る。新しい教科書やノートが、学習意欲を盛り上げる。授業びらきの段階では、経験年数や指導力はあまり関係がなく、誰が授業をしても上手にできることが多い。しかし、そのような上手な授業を、五月以降にも続けるのはなかなか難しい。続ける秘訣は、授業びらきを「学びの心びらき」として位置づけることである。そのためには、次の三つのことに留意をすることが大事である。

一三目は、「勉強したい」という気持ちにさせること。そのためには、子どもものみいところを見つけて、認めることである。文字が上手に書けている、挙手の指先が伸びている、発言が整っている。探せば次々見つかる。良さを見つける。また、子どものお話をしっかり聞くことで、信頼関係を築くことができる。

二四目は、「比べなさい」とである。子どもをうしろを比べる、今まで

授業びらきは 学びの心びらき

よしなが こうし
京都女子大学教授 吉永幸司



陣取り合戦で子どもに 負けたくないような強さを

授業びらきは教師と子どもとの陣取り合戦である。少し、ひがみっぽい言い方をすれば、「今度の先生はどのよつな先生か」と品定めをしてい

担任した子と比べる、前年度のクラスと比べる、というよつなことはしない方がよい。なぜなら、比べることの背景には、優劣をつけるという気持ちがある。劣った方に回った子に、それを乗り越えて頑張ろうという気持ちは、授業びらきの段階にはない。最初は、どの子ども自分がいい子だと思われたいし、これからの勉強に夢をもちたいのである。

三三目は、「冗長な話をしないこと」である。教師がはり切ると、妙に指示や説明が多くなる。しかし、聞くだけで疲れるのが子どもである。勉強のしかたや注意事項を最低限にする気持ちで話す。一年間頑張ろうという気持ちを育てるのは冗長な話ではない。学びの心を開く始まりは、一しつう丁寧に指導をやることだから。

る子もいる。だから、いろいろな手を使って子どもは試してみる。教科書を忘れる、冗談めいた行動をするなど。また、前の学年に叱られたり、注意を受けたりした子、賢いと思われている子への対応をじっと見ると、しっかりと指導をしてほしいという気持ちをそつう形で表す。それは、子どもが自分の陣地を広げようとする知恵である。だから、教師も子どもに負けたくないよう陣取りに勝つ覚悟が必要である。教師が、陣取りで子どもに勝つには、「とてもかわいくない」を思わせることである。上手な音読、美しい文字、丁寧に話しかけ、勉強嫌いを好きにさせるなど、教師として当たり前のことや子どもに見せるのである。これが子どもには「はげしい」ことである。この「はげしい」が本物になるよつに日常の研修をする。

つまり、陣取りで子どもに勝つには、「今度の先生は授業が上手、しっかり教えてくれる」と思わせるところである。それが、学びの心を開く授業びらきの決め手である。